駒鳥

蘆ふごにて巣草を入、就中玄ろの毛を能く望ムもの也、玉子産落シ、巣に入候日より十三日目に玉子開割、己と生立、春秋二腹宛生立、近年餘り澤山に生立候故、人是を不愛、此後に至、子又無多事可相成候間、鳥數寄の方心掛、無油斷生立置べく心得可有也、

〔運歩色葉集 鳥名〕駒鳥（コマドリ）

〔饅頭屋本節用集 古生類〕駒鳥（コマドリ）

〔本朝食鑑 六林禽〕駒鳥 訓古麻止利

釋名 鳥聲如走駒之鳴鑾故名

集解 狀似鶯而稍大、頭背蒼赤、頷頰赤色、腹灰黑、腹下白、羽尾俱蒼黑、嘴細利、脚細長而蒼、其聲高清而長滑、初似走馬之鳴鑾、春夏之際最多囀籠中亦久囀、爲宮中之弄、惟恐脚弱易損、山林處處有之、但和州播州之産最爲勝、其味不足用也、

〔和漢三才圖會 四十三林禽〕駒鳥

按駒鳥狀似鶯而稍大、○略中其聲高清而長滑、如曰必加羅加羅、似走馬之鳴鑾、其頭每振左右、亦如走馬之形勢、故名駒鳥矣、春夏能囀、畜之甚愛、之惟恐脚弱易損、性畏寒難育也、雌者頷頰色不甚赤、不能囀也、和州葛城洞籠川山中多有之、勢州宇治、城州比叡、攝州有馬、作州高津有之、然不如和州之者、

島駒鳥　狀相似而略小、頭背灰白、胸腹白而有黑彪、其彪如俗稱蛇腹紋者、甚美、囀聲如曰珍古呂呂、其囀也略値時代鷄鳴者爲最珍、

〔喚子鳥 上〕こま鳥　ふがい　生ふ四分、あをみ入、粉壹匁、

大きさすゞめに大ぶりにてせい高し、總身赤色はらねずみ色、さへづりたかねにていさぎよく、おもゑろきものなり、あら鳥春のすへに出る、あら鳥其年はさへづりほそし、す子はなつ出る、尤子がい重寶とす、手について羽をひろげ、尾を立てさへづるをてふりといふ、子は吉野どろ川よ